

講演会 & ライブ な日々 ⑳

古川 秀明

「家族造形法」

京都学校教育相談研究大会という、教師対象の研修会が毎年夏に開催されている。

今年で41回目ということは、41年前から開催されているということだ。

41年前というと、私はまだ高校生だった。

それがどうしたと言われると辛いのだが、私の高校時代は、もう41年も前の話なんだと思うと、感慨深い。

毎年講師として呼んでもらえるので、実力もないのにノコノコと出かける。

午前中は著名な実力者を呼んでの講演会。

過去には河合隼雄先生や、団士郎先生も講演されている。

今年は京都大学の松沢哲郎先生。

霊長類の研究で有名だ。

「アイ・プロジェクト」とよばれるチンパンジーの心の研究を始め、野生チンパンジーの生態調査もされている。

午後からは8つの分科会に分かれての研修。

私が受け持つのは第4分科会。テーマは「家族造形法」

<家族造形法とは>

家族造形法_family-sculpture (彫刻) は、1960年代に心理劇から派生した技法。

この技法は体験的で教示や伝達が難しく、利用も実証的研究もほぼない。

精神療法やカウンセリングは"語り"が中心、対する家族造形法とは、読んで字の如し。家族のメンバーを彫刻(立像)と見なし、実際の心理的距離を物理的に可視化する。

具体的手順は、

- ①援助者は進行役のみ。
- ②家族の中から1人、彫刻家役を選出する。
- ③彫刻家役にとって家族は"粘土のかたまり"。
"日常のイメージ"を忠実に再現するよう、
各人に自由にポーズや配置を施していく。
- ④援助者は彫刻家役に問いかけを用いて、
サポートや助言をしながら進めていく。

立つ、座る、足を組む、腕を組む、背を向ける、(家族の誰かに)寄りかかる、(自分以外の)服のすそや袖をつかむ、両手を広げる、前に突き出すなどの「ポーズ」。

満足(笑顔)、不機嫌(無表情)、心配、苦悩、享楽、悲哀、侮蔑などの「表情」。

円形(規則性)、不規則、煩雑、無作為、構成員同士での遠近、背を向けているが近い、正対しているが遠い、1人だけはずれるなど、「表情」と「ポーズ」と

の矛盾もある「距離」。

最後に彫刻家役自身も思うポーズで、家族の林立する像の中に参加する。
これで全員約1分間、なりきって静止。

しかるのち、順番に感想を發表する、あるいは援助者の質問に対する回答によって、
家族の問題点が可視化から言語化される。

<家族造形法の不思議な魅力>

造形法で出てきた家族のセルフと全く同じセリフが実際の家族から出て来ることにいつも不思議を感じる。

一度や二度なら偶然で済ませられる。

しかし、ほぼすべてのケースでおなじことが起きる。

私は $1 + 1 = 2$ にならないとなんか気持ち悪い性格。

なんでそうなるかの理屈が欲しい。

だから解釈がはっきりしている「MMP I」とか「WISC」とか「ロールシャッハ」とか「内田クレペリン検査」とかのプロフィール読む方がすっきりする。

ところがこの造形法は粘土になった人に「なんでそう思うんですか？」の答えは「う～ん、ただなんとなく・・・」

これは言葉を超えた感覚なのだと思う他になさそう。

人は自分の世界を自分の思考（思考は言葉）、つまり自分の言葉だけで世界を捉えている。

そうすると、言葉にならない外の部分はないものにしてしまおうとする。

脳みそがややこしいものの解析を嫌がるようだ。

そうなる、人は固定観念という物差しを持つ。

「お父さんの性格が悪い」「お母さんの子育てに問題が」「おばあちゃんの根性が悪い」「それは障害のせいだから仕方ない」「統合失調症の陽性症状からくる妄想だから抗精神病薬しかない」

造形法はこいつをみごとにひっくり返す。

外で見えていても分からない。

自分がそこに粘土になって存在したときに、どこからか湧いてくる。

言葉と理屈の外からくるネクストワンの感覚

なんとなくこれに近い感覚はジェンドリンのフォーカシングかもしれない。

私なりの考えだと、ユングの集合的無意識があてはまる。

人間そして、生きものはみんなつながっている。

人の受精卵からの細胞分裂の画像もそれを表しているといわれている。

魚類から爬虫類、猿、人間

ブッダもユングと似たような概念を語っている。(もちろん年代的にはブッダの方がはるか昔になる)

意識、無意識、阿頼耶識。

教師対象の研修会で造形法をやると、効果的に働くことが多い。

教師は知的に問題を解決するのが癖になっている。

なぜなら、いつもちゃんと答えが証明されていることを教えているからだ。

「いいですか、みなさん。1 + 1 = 2ですよ。あ、でもお空が曇っている時には6くらいになります」・・・なんてことはない。

それと同じように、どうしても人の心も、理屈と知的能力で理解しようとしてしまう。

間違いではないし、それで解決できる問題ならそれでいい。

造形法で扱うケースはたいてい学校の先生では解決できない難問が多いから、そのところの新しい視点の発見が、この造形法の研修の人気度を表しているのかもしれない。

簡単なレクチャーを済ませて、いよいよ実際のケースを元に家族造形法を体験してもらおう。

参加者は20名、さて、いかなる展開となりますやら・・・。

(次号に続く)

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき